

中学校社会科における人権学習の教材開発

—構築主義的アプローチに着目した「ハンセン病問題」の場合—

教科・領域教育専攻

社会系コース

長 江 徹 子

指導教員 西村公孝

序章 研究の目的と方法

本研究は、社会科授業の中で行われてきた人権侵害事例を扱った人権学習を検討し、構築主義的アプローチに着目した人権学習の教材開発を行うことを目的とする。

序章では、本研究の意義と方法を示した。

現在の社会には、様々な人権侵害問題に関わる社会問題が存在する。人権学習の授業で取り上げるのは顕在化している問題であり、社会的にも認知されている問題である。しかし、現実の社会には潜在化している問題もあり、価値観も多様化する現在、新たな問題も生じてくるであろう。そのような中で、社会認識形成を通して問題を見抜くとともに社会形成の視点から問題をめぐる社会的な営みに関わっていくことができる力を育成することが現在求められるのではないかと考えた。そこで、本研究では、従来行われてきた人権侵害事例を所与のものとする授業の課題を明らかにし、その課題を補うものとして構築主義的アプローチに着目し、教材開発を行うことの必要性を述べている。

第1章 社会科教育における人権学習

本章では、社会科教育における人権学習の性格を明らかにするために、学校教育活動全体における人権学習の目標と現状について述べ、社会科の性格と人権学習について整理した。

人権教育は学校教育活動全体を通して行われているが、問題を見抜き、解決の主体者となる生徒の育成を目指して、内容や方法論の検討が

行われていることを述べた。

第2章 先行授業実践の分析

本章では、中学校公民的分野における人権学習の授業実践を分析した。その結果、いずれの授業においても取り上げられる問題は実在論的に取り上げられており、問題を所与のものとして生徒たちに提示され、追究されることが明らかとなった。

課題としては①実在論的に取り上げた場合、人々の人権に関わる問題がどのように問題として規定されるようになったのかが生徒たちが捉えにくい点、②問題を問題として構築していく社会的な営みに個人や集団がどのように関わっていくことができるのかが部分的には取り組まれているものの、全体として掴みにくく不明確な点の2点が挙げられた。

第3章 構築主義的アプローチを取り入れた人権学習の教材開発

本章では、構築主義的アプローチを社会科の人権学習に取り入れる意義について述べた。

社会認識形成から見た意義としては次のような点を示した。人権問題を社会問題と捉えると何が社会問題であるかは可変的であるため、個別の人権課題を取り上げる際には、他の人権課題を捉える視点を掴ませることが必要になるが、構築主義的アプローチを取り入れれば、問題がなぜ問題と構築されていったのか、その原因や背景となっている事実やその根底にある価値観を解明していくことが可能となる。

社会形成の視点からは、①構築主義的アプローチによる異議申し立てに始まる一連の問題の生成過程を捉えることで、人権侵害を克服するための社会形成の手続きを学ぶことが可能となる、②構築主義的アプローチによって、「問題は構築されるものである」と捉えることで、自分たち一人一人が現在の社会をつくり出している一員であり、社会をよりよくするための構成員であることに自覚的になれることの2点を示した。

人権教育の視点からは、現在の社会の中で、「問題である」と当然のように認識されている問題が、問題と見なされていなかった状態から、人々によって問題として構築され、解決に向けて動き出したという「問題の構築過程」を捉えさせることによって、①あらゆる問題解決への展望を示すことができる、②「自分と社会のつながり」を考察し、自分の位置を批判的に捉え直すことが可能であることを示した。

第4章 小单元「ハンセン病問題」の展開

本章では、構築主義的アプローチに着目した人権学習の教材開発を行い、中学校公民的分野における人権学習の授業を開発した。

構築主義的アプローチによる人権学習の教材として「ハンセン病問題」を事例として取り上げた。ハンセン病を事例として取り上げた理由は、①どのように問題として構築されるようになったのかが明確であること、②学習主題が生徒の主題となりうること、③他の人権侵害問題を読み解く視点を掴ませることが可能であることの3点である。

小单元は、副田義也氏による「社会問題の輪郭」を参考に、

I 社会問題ではない段階（展開1）

II 一部の人々が問題であると主張している

段階（展開2）

III 問題であるかどうか判断が分かれている

段階（展開3）

IV 問題であると広く合意した段階（展開4）の4段階で構成する。つまり、社会問題が問題とされていなかった状況から、問題であると社会的に合意を得るようになるまでの過程を、生徒たちがわが国のハンセン病患者隔離政策等をめぐる人々の見解を考察する中で辿ることができるよう組織するのである。

小单元の指導計画は、導入、問題構築過程の4段階に基づいた展開1から展開4、終結の5時間配当で構成した。終結では展開4で確認した「問題であると人々が合意し、解決に向けて動いているはず」の現在を対象とする。ハンセン病回復者をめぐる現状を各自で調べ、自分の見解を示す段階を設定し、潜在化している問題を見抜き、問題として構築し、問い続けていくことが真の解決に向けて不可欠であり、その主体となるのは自分たちであることを掴んでいくのである。

終章 成果と課題

本章では、本研究の成果と課題についてまとめた。

本研究の成果は①これまでの人権侵害問題を所与のものとする授業の課題と構築主義的アプローチを取り入れた人権学習の意義を明らかにした点、②構築主義的アプローチを取り入れた教材開発に基づいた授業モデルを提案できた点の2点である。

課題としては、教材開発した授業のねらいが実際に達成可能なのか、その有効性を授業にかけて検証し、実践を通じて修正・改善を行うこと、また、他の事例による授業モデルの作成にも取り組むことである。